

IV 交換留学体験記

以下、○留学先大学（国・地域）／名前（所属学部&派遣当時の学年）／派遣期間

○ノーザンミシガン大学（アメリカ合衆国）／田中里澄（経済学部 4 回生）／2015 年 8 月～2016 年 5 月

・留学に至るまで

私は滋賀大学に入学してすぐのころからアメリカへの交換留学に興味があり、説明会にも参加しましたが、留学のために必要な TOEFL の勉強が難しく何度か諦め、結局留学に出発できたのは 4 回生の 8 月でした。出発の 1 年ほど前にこれが最後のチャンスだと思い、一生懸命勉強しました。



・生活

大学に着いてすぐに思ったことはとにかく敷地が大きいことです。キャンパス内に学生寮が 10 棟もあり、アメフトやアイスホッケーをするためのドームまであります。後にアメリカの中では小さい方の大学だと友人に聞かされ驚きました。私は住んでいた寮の友人にとっても恵まれていたと思います。留学を始めるまで、英語での会話なんてほとんどしたことがなく、上手く喋ることができない私を頻繁に食事や遊びに誘ってくれて、とても仲良くなることができました。最初のうちは、誘ってもらっているのをありがたいと思いながらも、アメリカ人に囲まれて全く喋れないでいることも多かったので辛く感じることも多かったです。

しかし少しずつ話せるようになり慣れてきてからはできるだけ会話する時間を長くしようと、授業が終わればすぐに寮内の TV ルームに行きテレビをみたり課題をこなしたりしながら友人と喋っていました。休日にはハイキングや買い物にでかけました。大学の敷地外にでるのは車が必要だったのでこれも友人のおかげでとても助かりました。アメリカは大学生が車を持っているのは当たり前のようなようでした。

・授業

予想していた通り、アメリカ人はとても積極的です。自発的な発言がとても多く、先生もそれを求めてきます。また予習で教科書を読んでおくのが当たり前で、その量が多いです。最初のうちは読み切れずに授業を受けることもあり、英語が聞き取れないし、予習もできていないやらの、とても大変な思いをしました。中国語の授業を履修していたときは、英語で中国語を勉強するので頭の中が混乱しました。アメリカ人がどのように外国語を理解しようとしているのかを近くでみるのができ、なかなかない経験ができたと思いました。マーケティングの授業では課題でケーススタディというものをし、具体的なビジネスモデルにおいてのある問題への解決策を提案しました。

・留学を通して感じたこと

自分に自信が付いたと思います。英語で全く知らない土地で生活できたのだから、まず日本ならどこでも大丈夫だと思いました。柔軟性や忍耐力があがったのだと思います。また、誘われたらとりあえずイエスというのが大事だと思いました。臆せず新しいことにチャレンジしていく姿勢をこれからも続けていきたいです。

最後になりましたが、国際センターの方は留学生生活を支えてくださり、また私を滋賀大学の代表として選んでいただきありがとうございました。また私の考えをいつも尊重し、支えてくださった家族にも心から感謝します。

○ミシガン大学アナーバー校（アメリカ合衆国）／Patcharaporn Pongpojkasem（経済学部3回生）／2015年8月～2016年5月

・なぜ留学？

私は日本に来る前にインターナショナル学校に通ってました。日本に来てから英語を話す機会がほとんどないため、自分も英語能力が低下し、これではダメだと思いアメリカ留学を決意しました。言語能力だけではなく、自分でアメリカの文化に触れ、社会に出る前に経験をたくさん積んでおきたいと思いました。



・行くまでの苦労・準備

最初の壁はやはり、TOEFLです。私が行きたかった「University of Michigan」のTOEFLの最低点数がかなり高く、2回受験し、やっと合格することができました。次に宿舎を探さなければなりません。大学の学生寮よりシェアハウスの方が安いので、そちらに決めました。シェアハウスとのやりとりは全て自分でしました。返事もなかなか来なくて心配でストレスを感じましたが、最終的に、「Luther House」というシェアハウスに住むことにしました。大きいスーツケース1つと小さいのを1つ持って行きました！中部セントレア空港からデトロイトまで約12時間の直行便でアメリカへ。

・アメリカ到着後

到着後はJCMUで知り合った友人が空港まで迎えに来てくれました。その時シェアハウスにまだ入れなかったので、4日間ほど友人の家に泊めてもらいました。私が住むシェアハウスは3階建てで、私の部屋は3階にありました。ハウスマイトは荷物運びを手伝ってくれて本当に助かりました。大学まで徒歩10～15分の所にあります。ハウスマイトたちは優しく、とてもフレンドリーでした。家は清潔ではないことを我慢するしかありませんでしたが、全体的に良かったと思います。

・授業

私が選んだ授業は主に心理学です。滋賀大学では学べない、新しいことが勉強してみたくて心理学や社会学を履修しました。1つの科目は週に2回授業と1回のディスカッション授業があります。

20人ほどのディスカッション授業では SA のような大学院生の方が指導し、話題などを提供し、自分の意見を述べクラスメイトと議論をする授業です。本講義ではスライドを使って、説明していく形式で大人数で行います。私は教授が言ったことをパソコンでノートを取っていました。日本と異なって、教授は話し合いの時間を作り、隣の席の人と話させたり議論させたりしました。そして、必ず質問タイムがあります。理解していない所をその場で学生たちが手をあげて、自ら質問をします。学生みんな積極的に授業に取り組んでいる姿に感心し、自分もこうなりたいと思いました。

アメリカの大学はとにかくリーディングが多く、少なくとも毎日 1 章を次回の授業までに終わらせるようにという課題です。特に、留学生である私はネイティブの何倍も頑張らなければなりません。当初は教科書を読まない授業についていくのが大変でしたが、だんだん重要な所が分かってくるまで全部読まなくても理解できるようになりました。試験前になると、24 時間開いている大学の図書館で夜遅くまで勉強していました。ディスカッションの授業で友達を作っていたので、一緒に勉強していました。

・課外活動

新歓活動もあって、大学のサークルなどがブースに出て活動内容を説明したりミーティングの案内をしたりします。私は料理するのが好きなので、「Wolverine Cuizine」というグルメ・料理雑誌を提供し、料理教室を企画するサークルに入って、料理教室の企画部に所属していました。週一回のミーティングがあり、イベントは 2 か月に 1 回のペースで行っていました。

また、2 学期目から知り合いの紹介で「Japanese Meet Up」というグループに参加しました。これは大学ではなく、一般の人が作り、日本人や日本に興味がある人たちが集まり、お喋りするグループです。英語の会話と日本語の会話で、週に 2 回大学辺りの喫茶店に集まっていました。参加者は主に社会人なので、新しい価値観を得られ、世界を広げることもできました。

・アドバイス

最初のアドバイスは、JCMU で友達を作っておくといいと思います。大学の授業はだいたい大人数で行うのでなかなか友達を作る機会がありません。そして、授業履修する前に Ratemyprofessor.com というサイトを使って教授の評価をチェックするといいです。また大学の Facebook ページに参加し、履修したい授業について投稿して聞いてみるのもいいと思います。実際アメリカに行って、感じたのは教科書の英語だけでは楽しい生活を送れません。雑談とかの話題についていけないので、時間があればアメリカのドラマや映画をたくさんみてアメリカ人が使っている日常の英語が覚えておきましょう。最後に、たくさん旅行してください。旅行はただの遊びではありません。様々な経験をし、自分の視野を広げてほしいと思います。

・最後に

アメリカに留学し、改めて日本の文化に気づきました。今まで当たり前だと思っていたことが「日本だからこそ、そうである」ということに気づき、日本の独特の文化を大切に思います。また、自分の母国であるタイの文化もさらに大切にしていきたいと思います。留学したことで、語学だけではなく、アメリカの文化を理解し、異文化間のコミュニケーション能力も向上させることができました。全てのことを自分で管理し、責任を持たなければなりません。これから生きていく中で必要な力を身につけることができ、様々な貴重な経験は私を成長させてくれたと思います。本当に

ありがとうございました。

○ミシガン大学ディアボーン校（アメリカ合衆国）／中村直人（経済学部 4 回生）／ 2015 年 8 月～2016 年 5 月

私は 2015 年 8 月から 2016 年 5 月までミシガン州のデトロイト近郊にあるミシガン大学ディアボーン校へ派遣させていただきました。私にとってこの留学プログラムは人生において最も濃く、あっという間の 8 か月となりました。

・留学を志したきっかけ

大学 2 年次の夏休みに参加した、ミシガン州立大学での 1 か月語学研修プログラムに参加し、現地の学生たちの学びに対する貪欲な姿勢や、さまざまな国々から来る学生たちと学ぶ中で非常に大きな刺激を受けました。そして次に海外へ来るときは語学力を磨いた上で長期間滞在したいと思い交換留学を志望しました。語学研修へ参加してからは、JCMU（Japan Center For Michigan University）の国内留学プログラムへの参加や TOEFL 学習などに力を注ぎました。



そして、大学 3 年の 2 月に交換留学へ派遣されることが決定しました。周りの同回生が就職活動で奔走している姿を見て、自分の将来が不安になることもありましたが、アメリカで自分ができることすべてを吸収してやろうという意気込みで出発前の事前準備に取り組みました。周りの一部の友人が就職活動を終え、少し不安もある中で 2015 年の 8 月末にミシガンへ飛び立ちました。

・周りの環境

私が滞在していたディアボーンはアメリカで最も高い割合でアラブ圏の方々が生活している地域で、大学内外で多くのイスラム教徒の方々を見かけました。ディアボーンを選んだ理由として、日本では出来ないことを体験してみたいということもあったので、そのような方々と交流する機会ができ、非常に素晴らしい経験となりました。イスラム教徒の友人は喜捨や助け合いの精神が強く、文化的差異を強く感じました。海外の留学生は中国とインドの学生が多く、日本人は自分のみでした。最初は不安でいっぱいでしたが、私が日本から来たということで、日本に興味を持っている多くの人が私に話しかけてくれて、お互いに仲良くなり、そのような不安はすぐに消えました。

私はキャンパスのすぐ横にある、寮に住んでいました。寮は二人部屋でキッチンが共用でした。私は車を運転できなかったため、毎週末のシャトルバスに乗って食料の買い出しに行っていました。寮の周りにはショッピングモールがあるのみで、車無しで生活するのは難しい状況でした。しかし、友人が車を購入し、さまざまな場所に連れて行ってくれたので、その問題は解決しました。

・現地の授業

授業は現地のアカデミックコーディネーターの方と相談した上で決定しました。1 学期目は英語の要件を満たすことが出来なかったため、現地の英語学校と学部授業の半分ずつを受講しました。次の学期に自分の取りたい授業を取るためにクラスメートたちと必死に勉強し、1 学期目終了時に

要件を満たすことが出来ました。1 学期目に受講したマーケティングをより深く学びたいと思ったため、その発展的な授業を中心に履修しました。現地の授業は想像していた以上に難しいものでした。多くの予習やグループワーク、レポート、プレゼンテーションなどの課題が出され、授業に追いつくことに精一杯で、図書館の自習室に深夜までほぼ毎日残っていました。また、グループワークではチームメートの議論を理解することで必死になり、自分の意見を聞かれたときに何も言えず悔しい思いをしました。そのため、チームで集まる前に自分の主張したいことを考えた上で、グループワークに臨みました。その結果、物事を考えて話すことが出来るようになり、意見もはっきりと述べる事が出来るようになりました。どのクラスも少人数で構成されていたため、教授との距離感が近く授業内の議論は常に活発でした。また、授業後に質問に行った際にいつも時間を割いて下さり、疑問点が解消されました。また、授業内で日本についての例が出てくることもあり、具体的な説明や意見が求められました。そういったところから日本について知ることが出来たことも貴重な機会となりました。

・課外活動・週末の過ごし方

現地ではサッカークラブに所属していました。学内のサッカートーナメントに出場し、優勝することができ、人生で初めてチームメートから胴上げをしてもらい、最高の瞬間となりました。週末は JCMU に来ていたミシガン州の学生と集まったり、寮で様々な国から来た学生たちと過ごしたりして、友好を深めました。特にインドから来た友人とは苦楽を共にし、お互いの国での再会を誓い、一生の親友と呼べるほどの関係になりました。彼らが支えてくれたからこそ最後まで留学生生活を頑張り抜くことができました。

・最後に

私は大学入学当初、英語をうまく話すことができませんでした。しかし、この交換留学プログラムに行くという目標が出来てから、英語力は飛躍的に向上しました。留学中、普段自分の過ごしていた環境との違いから辛いことや寂しい思いをしたことはあります。また、留学期間が就職活動の時期と重なるという不安もありました。しかし、アメリカでも日本人学生向けの就職イベントはありますし、インターネットで応募もできるため、アメリカに居るから就職活動ができなくなってしまうとは思いません。

私も将来への不安で押しつぶされそうになったときもありましたが、今、自信を持ってこの留学に行っても良かったと心から思います。日本と違う環境の中で、多くの文化的差異への理解力、外国から見た日本の印象、タフさ、そしてかけがえのない一生の友人を得ることが出来ました。ぜひ多くの人に挑戦してほしいと思います。

最後になりましたが、留学前から手厚いサポートをしてくださった学術国際課の方々、ゼミの吉田先生、そして快く留学へ送り出してくれた両親に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました

○サウスイーストノルウェー大学（ノルウェー）／神内 萌那（経済学部 2 回生）／
2015 年 8 月～2016 年 5 月

留学先としてノルウェーを挙げると驚かれることが多いですが、まず一つ目にクオータ制の発祥の国であること、二つ目に英語が母国語でないことから私はノルウェーに留学したいと思うようになりました。クオータ制とは「公的機関の構成員が 4 人以上の場合、4 割以上両性共に選出されなければならない」というもので徹底して女性が働きやすい環境づくりがなされています。また、初めは英語に自信がなく、英語が母国語でないことも私にとって魅力的でした。ノルウェーの母国語はノルウェー語ですが、ほとんどの国民が英語を話せるので全く問題なく生活することができました。



ノルウェーでは 1 日中明るく涼しい夏と -20 度にもなる暗くて厳しい冬を経験しました。私の行った **Buskerud and Vestfold University**（注・2016 年 1 月に現大学名に改称）は小さな学校で、38 人の留学生のうち日本人は私一人でした。最初のセメスターには韓国の女の子がいましたが、2 セメスター目はアジア人がおらず、多くがフランスやオーストリアからの留学生でした。住んでいた町も夜中に出歩いても全く危険を感じないようなところで、冬には運が良ければ学校の帰り道に薄っすらとオーロラを見ることもできます。物価が高いので、ほとんど毎日自炊していました。日曜日は国民の休日としてすべての店が閉まるので、週末にはホームパーティーをしたり、友達とクラブに行ったりと暗い冬でも楽しく過ごすことができました。

留学に行った一番の目的は「語学力を伸ばすこと」でした。留学当初は周りがネイティブのように感じられ、皆は英語を話せることが当然で、その上で英語でビジネスを学びに来ている、という自分との歴然とした差に壁を感じたこともありました。授業も日本とは違い、どの授業でもディスカッションの時間があります。1 つの授業は 4 時間で、初めのころは聞き取るのに精一杯でした。しかし、毎日予習・復習を続けているうちに自分の意見を積極的に話せるようになりました。さらに、留学も 2 セメスター目に入ると意識しなくても話が聞こえるようになり、授業もとても楽になりました。実際先生方からも「1 年いたことで英語力が著しく伸びた」と言っていたので、もし留学の期間で悩まれている方がいれば、是非 1 年間留学されることをお勧めします。

私がこの 1 年間を通して得たものは「自信」です。それは 1 年という期間、全く日本語を話さず英語だけで過ごしたということが大きいように思います。留学前に思っていた「現地に行けば話せるようになるだろう」という程には甘くない留学生活でしたが、たくさん悩んだ分成長できたと感じます。また、冒頭で述べたクオータ制度についても、実際に女性が男性と同じように昇格するチャンスがあり育児をしながらも働きやすい、ということをよく耳にしました。そういった自国とは異なる環境の国に身を置いたことも自信の 1 つに繋がっていると思います。留学したことでより英語を話すことが好きになり、また、話したいと思うようになりました。

もし皆さんの中に少しでも留学に興味があるという方がいれば是非行くことをお勧めします。期

間については、できるなら1年行く方が良いと思います。私は2回生の夏から3回生の5月まで留学していましたが、きちんと準備をしていれば、4年で卒業することも可能だと思います。また、留学中にもきちんと勉強して、積極的に話す癖をつければ帰ってくる頃には必ず話せるようになっていくはずです。私もこの留学で得たものを無駄にしないよう、努力し続けたいと思います。

最後になりましたが、留学するにあたって支えてくださった全ての方に心より感謝いたします。有難うございました。

○ゾイド大学（オランダ）／宮山 陽香（教育学部4回生）／2015年8月～2016年7月

・留学動機

私は2015年8月から2016年7月までの約11か月間、オランダのマーストリヒトにあるゾイド大学に留学しました。私は昔から外国人と会話したり、異文化を知るのが好きでした。しかし、大学に入ってからなかなか外国人と英語でコミュニケーションをとることができず、もっと英語を上手く話せるようになりたい、たくさん友だちを作りたい、自分の世界を広げたいと思い、英語で全て講義を行っているゾイド大学への留学を志望しました。



・マーストリヒト

マーストリヒトはアムステルダムなどの大都市と比べると、とても落ち着いた街でしたが、そのおかげで勉学に集中することができたと思います。ヨーロッパなので治安が悪いのではないかと心配していましたが、オランダはヨーロッパ諸国の中では比較的治安がよく、その中でもマーストリヒトは日本よりも治安がいいのではないかと思えるほどでした。マーストリヒトでは、買い物へ行く時や街で歩いている時、オランダ人の子どもにさえ、ほとんどの確率でオランダ語で話しかけられたため、オランダが多文化共生社会であることを実感しました。街の中心にはマース川が流れ、天気の良い日に散歩すると、時間がとてもゆっくり流れているのを感じました。また、ベルギーやドイツの国境近くであったため、休日には簡単に日帰りで国外旅行ができました。街の中心地へ行けば必要なものはだいたい揃えることができましたし、カーニバルなどの楽しいイベントもたくさんあり、マーストリヒトに住むことができ本当によかったと思っています。

・ゾイド大学・講義

ゾイド大学は滋賀大学よりも小さく、こじんまりとしています。元修道院ということもあり、建物内はきれいです。この大学にはオランダ人以外にもベルギー、ドイツやフランス、スペイン等、ヨーロッパ各国からの留学生、また中国等のアジアからの留学生がいて、オランダ人以外にも様々な国の友人を作ることができました。学校のキャンテーンへ行くと様々な言語が話されているのが聞こえ、とても国際的な学校だといつでも感じることができました。

学校は4ブロック制でテスト期間や休暇もかなりあるため、1ブロックが7週間程度ととても短いですが、その分1週間で学ぶ内容は濃いです。また、講義によっては毎週宿題があり、宿題に追われる日が多かったです。

私はゾイド大学でヨーロッパ研究という科目群を選択しました。これは主にヨーロッパの文化や政治、経済等に焦点を当てた科目群です。私はこの科目群で学習したことにより、留学以前よりもテロや難民問題に対する意識が高まったことを感じました。

ゾイド大学では、日本の大学のような多数の学生に対して先生一人が講義を行う講義スタイル(レクチャー)のほかに、少人数のクラスごとに分かれ、学生がレクチャーや教科書から学んだ内容をグループでプレゼンテーションしたり、学生同士でディスカッションをするスタイル(ワークショップ)がありました。その中でも、ワークショップは私にとって大きな壁となりました。私は上手くプレゼンテーションをできるほど講義に関する専門的な英語を流暢に話せませんでしたし、ディスカッションに関しても知識のなさから自分の考えも浮かばず、浮かんだとしてもそれを伝える英語力も足りませんでした。それに比べ、周りのオランダ人やその他の国からの留学生はプレゼンテーションを難なくこなし、ディスカッションでも自分の意見をしっかりと伝えているところを見て、彼らにとって英語は学ぶものではなく、コミュニケーションのツールなのだとすることをひしひしと感じました。そんな中でも何回もプレゼンテーションを練習したり、ディスカッションの内容を事前に予習することでなんとか周りに追いつくことができました。留学終了時期には周りの友だちから、前より英語やプレゼンが上手くなった、と褒められ勉強や練習の成果を実感しました。

また、ゾイド大学では、留学生向けのオランダ語の講義もあり、大変役に立ちました。講義は文法や単語のみを詰め込むのではなく、実際に使いそうな場面を想定して会話をしたり、手紙を書いたりするという内容で、楽しみながらオランダ語を学習することができました。習ったことをオランダ人に対して使うことができたり、街に出た時に言われたことがわかるととても嬉しかったです。

・オランダでの生活・友人関係

最初は英語が上手く話せなかったり、イメージ通りのすごく直接的なコミュニケーションの取り方に悩み、クラスメイトと打ち解けるのに少し苦労しました。しかし、オランダ人が固まってオランダ語で会話している時に「陽香がわからないから、英語で話そう」と言ってくれる人や、課題等で困っている時にいつでも助けてくれる人ばかりで、恵まれた環境の中にいると感じました。

学生生活で日本と異なる点といえば、オランダでは誕生日や新年、試験終わりなど様々なことを理由にし、たくさんの友だちを呼んで、夜中から朝まで家でパーティーを開きます。最初は日本とは全く違うスタイルに戸惑いましたが、慣れるとすごく楽しめましたし、そこで友だちの輪を広げることができました。また、そういった場で日本のことについて話すことで、友人たちに日本の文化に興味を持ってもらえたので、良い異文化交流の場であったと思います。

・留学を振り返って

11か月間は驚くほどあっという間に過ぎ去り、苦しい・辛い日々も少しありましたが、毎日学校に行くのが楽しかった留学でした。それはいつも支え合い、冗談を言い合い、共に努力することができる友人ができたからだと思います。一生友だちでいられるような友人に出会えたことを、とても嬉しく思います。オランダへ到着し学校が始まったころは授業についていけるか、友だちができ

るか等の不安がたくさんありましたが、終わってみると、思っていたよりも楽しく過ごすことができ、何事も乗り越えることができるという自信に繋がりました。この自信を今後の自分にも活かしていきたいと思っています。

最後に、私の留学をサポートしてくれた学術国際課の方々、友人、家族には心から感謝しています。ありがとうございました。

○レイクスペリオル州立大学（アメリカ合衆国）／北川雄基（経済学部4回生）／2015年9月～2016年4月

私は2015年9月初めから2016年4月末まで、アメリカ合衆国ミシガン州のスペリオル湖州立大学に留学しました。8か月という非常に短い期間ではありましたが、その時間は私にとって人生で一番充実したものでした。



私が交換留学に興味を持ったきっかけは、滋賀大学の提供していた海外研修に参加しオーストラリアに行ったことです。当時の私は英語も全く話せず留学など考えたこともありませんでしたが、4週間という短い時間のうちに初めて体験したホームステイや語学学校で知り合った海外の友達と話すことの楽しさにすっかり気づいてしまい、帰国した時には留学というものを真剣に考えるようになっていました。留学に必要な語学力を補うために TOEFL の参考書を買って、1年独学で勉強し続けました。英語に少しでも慣れるため大学近くの語学学校にも遊びに行き、アメリカ人と下手な英語でもしゃべるようにしていました。留学の審査の前までに何とか TOEFL の基準点をクリアすることができ、結果として交換留学生としてアメリカ、ミシガン州のスペリオル湖州立大学に派遣していただきました。

スペリオル湖州立大学はミシガン州の中でも特に小規模の州立大学で、キャンパスのある町も非常に小さなものでした。キャンパス内では野生のリスやキツネもうろろしており、アメリカにもこんな地域があるのだという、考えてみれば当たり前のことに驚くと同時に、普通の留学では経験できないようなことが経験できるとわくわくしたのを覚えています。大学ではビジネス、社会学、歴史、政治学など様々な講義科目を幅広く取っていましたが、小テストやクイズなどが頻繁にあるため、常に勉強をしていなければならない状態でした。最初の3か月ほどは毎日教室と図書館の往復を繰り返して寮に戻るのには夜遅くだったため、いっそ図書館に住みたいと思ったほどです。それでも休日は現地の友人たちと遊ぶ時間を極力取るようにして、気分転換を図っていました。また、課外活動にも積極的に参加してみたいと思っていたので、2015年にできたばかりの留学生クラブへの参加や、スポーツなどの活動も、週に1度のペースでしたがおこなっていました。

8か月というのは長いようでとても短い期間ですが、やはり楽しいことばかりではなくしんどいこと、つらいこともありました。例えば、当時大学には日本人はおろかアジア人留学生も非常に少なく、どんなに困ったときでも日本語は使えませんでした。はじめはそれに関連してストレスを感

じること多々ありましたが、州立大学の職員の方々や現地の友人たちの温かいサポートもあり、次第に苦にならなくなっていきました。また自分のつたない英語で必死に意思疎通を図るうち、英語力だけではなく精神的な強さもみるみる向上していくのを感じることができ、自信もついていきました。今では、数々のつらい経験もすべて含めて、最高の留学だったと言い切ることができます。

最後に、学術国際課の皆様をはじめとして私の留学をサポートしてくださったすべての滋賀大学の関係者の方々、無茶な頼みを聞いてくれた家族に心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

○国立高雄大学（台湾）／貝藤 美和（経済学部 3 回生）／2016 年 2 月～2017 年 1 月

まず初めに思うことは、帰国したところですが、もうすでに台湾が恋しい。そんな風に思えるほど留学生活は充実していました。しかしこれは今だから思えることで、当初は試行錯誤の毎日でした。飛行機から降りると中国語が飛び交う台湾でした。それはもちろん当たり前だけれど慣れていかなければいけない環境でした。しかし最初空港で出迎えてくれた高雄大学の国際ボランティアの学生さんたちは皆さん親切にしてくださり、不安が少し和らぎました。ボランティアの方たちは来る前から念入りに準備してくださっていたようで、買い物も寮に入るのもスムーズに行えました。



しかしこの寮というのは四人部屋で現地の学生と、交換留学生がルームシェアするという感覚です。台湾ではルームシェアは一般的で、トイレ、浴室を共同で使います。日本人の私たちからすると初めは慣れず苦勞することも多々ありました。まず、私の場合初めはコミュニケーションをとるのに苦勞しました。台湾人と中国人の会話が飛び交う中そこにどう入っていくか、どう距離を縮めるとお互い暮らしやすくなるのかなど。

当初は現地の人の会話スピードは恐ろしいほど速く、簡単な会話さえも聞き取るのに苦勞しました。聞くことに精一杯でした。そのため聞き取れない度にもう一度繰り返してもらえるようお願いし、ノートに書いてもらうなど悔しいですが負けてはいけないと思う日々でした。ルームメイトから友達まで皆さんがそれに付き合ってくれたことに心から感謝しています。もちろんルームメイトに対して文化の違いや生活習慣の違いで疑問に思うこともありました。そんな時もお互い隠さず話せたことが上手くやっていくコツだったのかもしれない。

何よりも、国際ボランティアの方たちが忘れず定期的に声をかけてくれたことは心の支えでした。見てくれている友達がいることは心強く、その方たちは私からエネルギーをもらっているとまで言ってくさいましたが、実は私が一番エネルギーをもらっていたと思います。

その時、自分に圧倒的に足りていなかったものは、聞き取り能力だと理解してからは、解決への方向性が少し見えました。机に座ってだけでなく実践的に耳を慣らす作戦でした。具体的に言うと、

語学交換の時間が特に効果を感じました。ボランティアの友達や、大学で知り合った友達との言語交換は情報交換できるだけでなく、お互いの語学の勉強にもなりました。まさに実用的な中国語を学べる有意義な時間でした。その甲斐あって三か月を過ぎたころにようやく大体の日常会話を聞き取れるようになり、コミュニケーションがスムーズに取れるようになりました。それからはただ会話をするだけでなく話題のレベルも上げていくためにお互いテーマを決め討論をする時間も取りました。そうすることで日常では出てこない中国語も覚えることが出来ました。台湾で暮らすことはすべてが勉強であり日常に沢山の新鮮な出来事が転がっていたのです。一年間色々な国の留学生や台湾人と同じ部屋で暮らせたことも、冷蔵庫のない生活も、バイクに乗って出かける生活も何もかもが異国文化を学ぶことが出来るチャンスでした。

留学のプログラムの一つであったホームステイもとても印象的です。このホームステイプログラムは一般のホームステイとは違い、週末や空いている時間に一緒に出掛け、食事に行ったりするためのプログラムでした。よく週末、一緒に山登り、博物館、交流会など沢山のことに挑戦しました。家族の方はとても親切な方たちでした。優しくもあり厳しくもあった家族の方々には感謝してもしきれません。

また、同じように留学で来ている人たちとの出会いもとても私の中で大きなものでした。皆さん国は違いますが同じ言語を学びに、目標は人それぞれ違いますが、それを共有できとても感動しました。授業後にみんなでお互いの国の料理を食べに行くことが定番になっていました。また、彼女たちと出会い、先入観だけで他人を判断することはいけないということも学びました。お互いを知ったからこそ話せることもたくさんあり、お互いの国の言葉は話せなくとも、今こうして中国語でお互いのことを伝えあえることに感動しました。

初めのころに言葉の壁があることがストレスでうまく自分の気持ちを表現できなかった、その悔しさを今でも覚えています。しかし、がむしゃらになれたのは海外で日本ではない自分の新たな一面を開拓できたおかげだと思っています。恥ずかしさを捨て貪欲に生活し、日本の私なら勇気が出ないことも何故か海外なら一歩踏み出せたような気がします。

毎日何か起きると一喜一憂するときもありましたが、すべてが勉強で、自分でどうすればより便利か快適になるか、解決できるかを考えることが出来る時間でした。最後に帰国前に目標にしていた中国語の検定にも合格することが出来たことに達成感を感じたことを忘れません。一年間を異国の地で生活することは想像をはるかに超える困難なことがたくさんありました。言語だけでなく生活習慣の違い、価値観の違い、文化の違いなどぶつかることも多くありました。しかし日本にいただけではいくら日本が積極的に海外進出し事業で成功を納めるなどしていても、私はその実際の日本以外の国の現状を深く理解する機会はなかったと思います。

台湾に留学し実際に生活することで見てきた日本と台湾の友好関係の強さなどをこれからも大切にしていきたいです。高雄大学に交換留学に行く前、留学中、留学後、その過程でお世話になった全ての方々に感謝したいです。

○ゾイド大学（オランダ）／Ong Yi Xian（経済学部4回生）／2016年2月～7月

ゾイド大学はヨーロッパをはじめ、世界各国から学生が集まっています。国際色豊かな環境にありますので、グローバル人材の育成に適する学校です。留学生も含め、在籍している学生へのサポートは充実している大学でもあります。また、学習面から生活面まで、何でも相談に乗ってくださる先生が各学生についています。



実は初日に、私の不注意で階段から転げ落ちてしまいました。この事故の為、足が不自由になりましたが、そんな私を見かけて声をかけてくれたり、助けてもらったりして、オランダ人の優しさを感じることができました。そのほか日本語を専攻している学生もたくさんいます。彼らは情熱的で親切ですから、とてもフレンドリーに接してくれます。

・学習面

国際ビジネスコミュニケーションという学部があり、その中の「国際ビジネス」というコースを専攻していました。ゾイド大学の授業で良かったと思ったことは、プレゼンテーションと、実践的な授業があること、また能動的な授業です。大半の授業はチームごとにプレゼンテーションをする必要があります。プレゼンテーションスキルやチームワーク、他人との協調性等も磨くことができます。ゾイド大学は応用科学大学ですので、学生さんは論理を勉強している一方、それらの知識を応用できる課題が出されます。よって、将来の実際の仕事の様子を想像することができると思います。また、アジアの教育と違い、ゾイド大学は西洋式の教育で、学生たちは自由に授業で質問したり、発言したりできて、とても良いと思います。また、当コースは色々な国の文化について触れることができ、国際的な感覚を養えるとともに、異文化への理解と意識がさらに高まりました。また、授業は全て英語で実施しているので、英語能力はかなり鍛えられます。

・生活面

ゾイド大学はマーストリヒトに位置しています。彦根と同じで比較的小さい、落ち着いた町ですが、都市の中心にたくさんの服屋さんや映画館、レストランやバー等が集まっているので、生活に苦労しませんでした。また、意外と日本食店やアジアスーパーもあるので、日本食を食べたいと思った時も、心配ありません。また、非英語圏のオランダが実はヨーロッパでは英語の普及率が一番高いと言われ、8割の国民が英語が話せます。実際に公共機関、スーパー等オランダ語しか書いていない所がいっぱいあります。大学でオランダ語の授業を通じて、少しずつ日常生活に重要なオランダ語の単語を覚えて、生活に段々慣れてきました。そのほか授業で学んでいない言葉でしたら、グーグル通訳辞書などを使いながら、買い物をすることもよくあります。

ゾイド大学は部活がなく、授業以外には娯楽活動を楽しみます。友達と映画館に行ったり、パーティーに行ったり、ご飯を作って食べたりしました。スポーツが好きな学生には、ゾイド大学が連携しているスポーツセンターがあります。1人で運動をすることもできますし、そこで行われる学生向けのスポーツイベントにも参加できます。私は大学のすぐ近い所に住んでいたの、普段は

バスで移動していました。ただ、大学から遠い所に住んでいて、ほぼ毎日授業がある人には、自転車の購入をおすすめします。また、自転車王国と言われるオランダだからこそ、自転車が盗まれるということもよく耳にするので、自転車をしっかり管理することが大事です。

・さいごに

半年ではなく 1 年間行けば良かったと思うほど、あっという間に、ゾイド大学での留学は終わりました。半年間だけでしたが、色々なことを学んだり、刺激を受けてきました。留学することを迷っている人がよくいますが、人間は考え方や育った環境、性格などがそれぞれですので、留学から得たことも違ってくるはずですよ。その人それぞれの留学の楽しさがあると思います。留学生生活をより楽しく過ごすための一番大事なことは、常に好奇心を持つことと、前向きになることです。人生は一度切りのものなので、自分なりの留学経験を作ってきてください。

○ディーキン大学（オーストラリア）／伊藤 友伽（経済学部 4 回生）／2016 年 2 月～11 月

私は 2016 年 2 月から 11 月までオーストラリア・メルボルンにあるディーキン大学に交換留学していました。ディーキン大学に留学を決意した理由は、高校生の時にメルボルンに短期留学をして、メルボルンの街に魅力を感じ、もう一度メルボルンに留学したいと思ったことと、日本にとどまらず、留学を通して、国際的な視野を持ち、世界のこともっと知りたいと思ったからです。



この留学ではまず、ディーキン大学付属の語学学校で英語を学び、その後にディーキン大学の学部でマーケティング、コミュニケーション、そして、現代のメディアについての 3 つの講義を受けました。また、課外活動として、現地の大学の卓球部に所属し、普段の練習や現地の大学生が出場する試合に参加したりしていました。

語学学校では、私は EAP (English for academic purposes) コースのレベル 1 から 4 までを受講しました。EAP コースには、私と同じようにアカデミック (大学進学に必要な英語力) 英語を勉強しにきている海外からの留学生がたくさんいました。レベルが上がるごとにクラス替えもあったので、世界各国出身の友人を作ることもできました。彼らとは授業の内容を教えあうことをしたり、お互いの国の文化や生活について話し合ったり、休日には、勉強の息抜きも兼ねて、一緒に遊びに出かけたりしていました。そんな友人たちとの出会いは、私にとって、日本という国や自分自身について見つめ直すきっかけにもなりました。また、語学学校の先生たちは厳しい部分もありましたが、本当に熱心に指導してくださったので、非常に素晴らしい環境で英語を学ぶことができました。

学部の授業では、現地の学生と講義を受けました。講義一つにつき 3 つのアセスメントがありました。グループワーク、プレゼンテーション、期末テスト、レポートなどです。また、それに加えて、授業ごとに予習 (教科書や論文を数十ページ読む) などが必要不可欠だったのでほとんど毎日

勉強に追われていました。海外の講義を受けることは想像以上に大変でしたが、講義を重ねるごとに内容により一層興味を持ち始め、気づいたら毎回の授業が楽しみになっていました。私が一番興味を持っていた講義は、オーストラリアでのマーケティング・コミュニケーションの講義でした。日本ではなかなか勉強できないことだと思うので、留学して学ぶことができ良かったです。留学する前は、自分が本当に語学学校のクラスに合格できるのか、学部の授業についていけるのか、不安でいっぱいでしたが、最終的には全てやり遂げることができたので嬉しかったです。

勉強面以外では、ホームステイ先の近くにある大学の卓球部に所属していました。ここでは、英語だけではなく、スポーツを通して、友人を作ることができました。さらに、英語が完璧でなくても、試合に勝った時の喜びと負けた時の悔しさを仲間と共有できるといったスポーツの素晴らしさに改めて気づくことができました。

この大学在学中に、思い切って留学を決断して本当に良かったと思っています。なぜなら、人との出会いを通して、自分の知らない新たな世界を知ることができたからです。特に、年齢も国籍も幅広い友達との出会い、オーストラリア人のホストファミリーとの出会いは自分の今までの価値観を大きく変えるきっかけになりました。また、この留学では楽しさだけでなく、失敗や困難に直面することもたくさんありました。しかし、それも含めて留学で経験したことは一生の宝物になりました。最後に、この留学が成功したのは、家族、友人をはじめ、多くの方々に支えられたからです。本当にありがとうございました。

○啓明大学（韓国）／青木 悠起（経済学部2回生）／2016年3月～7月

2016年3月から一学期間、私は韓国の啓明大学に留学させていただきました。1学期間という短い時間ではありましたが、非常に充実した留学生活を送ることができました。もともと、外国に関心があったわけではありませんが、1回生の頃にタイを訪れた際、外国の何ともいえない面白さに魅了されました。外国に行けば新たな発見があると思い、留学を決意しました。



大学では、韓国語や韓国文化などの授業を履修しました。

どの授業も内容が非常に充実していて、受講してよかったです。すべての授業を英語で受けていたのですが、渡航前により高い英語力を身につけておけばよかったと思うほど、現地の韓国人学生や他の留学生の英語力は高かったです。そして、そのこと以上に驚いたのが学生の知識の量です。KAC（Keimyung Adams College）では、全授業を英語で開講しているのですが、その学生は特に知識の量が多かったです。英語が流暢なのは当たり前で、豊富な知識をもとに、教授や他の学生と議論していました。正直、彼らの英語力や知識、姿勢には度肝を抜かされました。

また、日本の大学との主な違いとしては、1学期に中間・期末の計2回テストがあること、一週間に2回同じ授業があるということです。これにより、学習内容を知識として定着しやすくなるので、

非常に良いことだと思います。韓国は教育に力を入れていて、学歴が大切だとよく言われるように、まじめな学生が多いように感じました。授業中には高い集中力を保ち、図書館では夜遅くまで勉強している学生が大勢いました。

留学中は学校の授業以外にも、様々な活動に取り組みましたが、中でも CCAP (Cross Cultural Awareness Program) では、特に有意義な時間を送ることができました。このプログラムは、留学生が韓国人学生とペアになり、テグにある小学校や中学校、高校に出向き、授業を行うというものです。私たちは日本の文化を紹介する授業を行いました。その後の質疑応答の時間では、アニメや漫画についての質問から政治に関する質問まで多岐にわたる内容になりました。日本の学校の場合、教育実習関連以外で授業に入ることはないと思いますし、ましてや、外国の学校で授業をするということは本当に貴重な経験だったと思います。

韓国では、中学校や高校の段階から、第二外国語として日本語や中国語を学習することがあるそうで、日本語と関連のない専攻でも、日本語の簡単な読み書きや会話はできるという韓国人学生が少なくありませんでした。流暢でなくても、相手が自分の母国語を話してくれたら、お互いの距離は一気に縮まると思います。外国語ができるということは、国際社会において、大きな武器になると改めて感じ、早期から外国語に触れることは、国際感覚を養う上で有利になるとも感じました。

他にも、大学の体育大会に参加したり、郊外でハーフマラソンに参加したり、友人宅にホームステイしたり、旅行したり、存分に留学生活を楽しむことができました。留学するにあたって、慎重になってしまうこともあるかと思いますが、大胆さも必要です。一つの行動がいろいろな新しい発見へとつながります。

最後に、今回の留学を有意義なものにできたのは、自分の周りにサポートしてくれる人がたくさんいたからで、本当に感謝しています。

